

祝辭

美知代

アラ、ギ、嬉しいの子、名からして好きヨ
足曳の山のあらゝぎ
只一本 つみてもて来て
我妹子が 袂に入れし
足曳の 山のあらイぎ
今も猶 さやかに匂ふ
あな嬉し いまだ我をば忘れ給はじ
と、松岡國男の君は謠ひ給ひぬ、之は妾
の愛誦な、而してアラ、ギ欄特設の祝
辭としたいノ。

作廻し文(第一回)

アラ、ギ特色の一として、廻し文を初めては如何に
この議、同人間に起り候處、氣の揃ひし手合とて、
云ひ出すが早いか直に定まり、即時に初めることゝ
致申候、
迄は可かりしが、勿卒の際、氣ばかり焦りて、事中
々意に随ひ不申。

詮方なくと申しては活地無き咄ながら、事實故
致方御座なく——兎に角、第一回に

一、前者の意を受くると受けざるは一に筆者の自由
なり

一、議論たるさ感想たると寫生たると其他たるとは
一に筆者の權内に在り

一、名指して送られたる以上は少なくとも一語以上
は必ず謂はざるべからざるは筆者の義務なり、
然れども筆者は強いて長く又強いて短くする
の義務なし

と、云つたような規定にて、不取敢纏め申候
第二回よりは、屹度前者の意を受け、少くとも全篇
を通じて動靜血脈の實行せる、極めて斬新奇抜なる
書簡文を得たきものと、同入一同腕に振をかけ居申
候

先ははしがきに添へて天機を漏すこと如斯に御座候

伊藤銀月 永井嘯月 高野碧女

喜多大象 登羅多樓 筒井重坡

鈴木翠嶼 伊藤政女 岡田美知代